

## 1 用語集

**体 (field)** 加減乗除 (四則演算) ができるような数の体系. 集合  $K$  に加法  $+: K \times K \rightarrow K$  と乗法  $\times: K \times K \rightarrow K$  と呼ばれる 2 つの写像が定義されていて, いくつかの公理を満たすものとして抽象化・形式化される.  $K = \mathbb{Q}, \mathbb{R}, \mathbb{C}$  が授業で登場した.

**行列 (matrix)**  $m \times n$  行列  $A = (a_{ij})_{1 \leq i \leq m, 1 \leq j \leq n}$  とは,  $m \times n$  の表に  $K$  の元を配置したもの.

**行列に付随する線型写像 (linear map associated with a matrix)**  $m \times n$  行列  $A$  は,  $K$  線型写像  $F_A: K^n \rightarrow K^m, \mathbf{v} \mapsto A\mathbf{v}$  を引き起こす. 逆に, 任意の  $K$  線型写像  $f: K^n \rightarrow K^m$  はただ 1 つの  $m \times n$  行列  $A$  によって  $f = F_A$  と書くことができる.

**転置 (transposition)**  $m \times n$  行列  $A$  を, 対角線で折り返して得られる  $n \times m$  行列  ${}^t A$  のこと.

**正則行列 (invertible matrix)**  $n \times n$  行列  $A$  であって, ある  $n \times n$  行列  $B$  が存在して,  $AB = E_n = BA$  となるもの (非自明な定理として,  $AB = E_n \Leftrightarrow BA = E_n$  が証明できる). この  $B$  は唯一つ存在することが証明でき,  $B = A^{-1}$  と書かれる. いくつかの同値な特徴づけを持つ:

1.  $\det(A) \neq 0$
2.  $\text{rank}(A) = n$
3.  $(A|E_n)$  を行基本変形のみで  $(E_n|B)$  にできる (このとき  $B = A^{-1}$ )
4.  $A = (\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_n)$  とすると  $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_n$  は  $K^n$  の基底

**共役 (conjugate)**  $n \times n$  行列  $A$  と  $B$  は, ある可逆行列  $P$  が存在して  $B = P^{-1}AP$  となるとき共役の関係にあるという (共役関係は同値関係である).

**係数行列と拡大係数行列 (expanded coefficient matrix)**  $n$  未知変数  $m$  立連立方程式

$$\begin{cases} a_{11}x_1 + \dots + a_{1n}x_n = b_1 \\ \vdots \\ a_{m1}x_1 + \dots + a_{mn}x_n = b_m \end{cases}$$

は, 行列積を用いて  $A\mathbf{x} = \mathbf{b}$  と書き直せる. ここで  $A := (a_{ij})_{1 \leq i \leq m, 1 \leq j \leq n}$  は  $m \times n$  行列で,  $\mathbf{x} := (x_i)_{i=1}^n$  は  $n$  次元ベクトル,  $\mathbf{b} := (b_i)_{i=1}^m$  は  $m$  次元ベクトルである.  $A$  がこの連立方程式の係数行列で,  $m \times (n+1)$  行列  $(A, \mathbf{b})$  は拡大係数行列と呼ばれる.

**クラメルの公式 (Cramer's formula)** 上で  $m = n$  のとき, 係数行列を  $A = (\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_n)$  のように  $n$  次元縦ベクトル  $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_n$  を並べた形で書く. 連立方程式の解は,  $\det A \neq 0$  ならば

$$x_1 = \frac{\det(\mathbf{b}, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_n)}{\det(\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_n)}, \quad x_2 = \frac{\det(\mathbf{a}_1, \mathbf{b}, \mathbf{a}_3, \dots, \mathbf{a}_n)}{\det(\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3, \dots, \mathbf{a}_n)}, \quad \dots$$

**行基本変形 (basic row operation)** 以下の 3 つの操作のこと

1.  $i$  行と  $j$  行を入れ替える ( $i \neq j$ )
2.  $i$  行に,  $K$  の非ゼロ元  $c$  をかける ( $c \neq 0$ )
3.  $i$  行に,  $j$  行の  $K$  の元  $c$  倍を加える ( $i \neq j, c \in K$ )

連立方程式の拡大係数行列に行基本変形を施しても, 同値な連立方程式が得られる.

掃出し法 (Gaussian elimination, row reduction) 行列に行基本変形を施して、階段行列にするこ

と。連立方程式の拡大係数行列に掃出し法を施すと、同値で簡単な連立方程式が得られる。

後退代入 (backward substitution) 階段行列が係数行列の連立方程式を、逆向きに体系的に解く

(あるいは解けないことを示す) こと。

階段行列 (echelon matrix) ある  $r$  が存在して

1.  $(r + 1)$  行目から最終行までは、すべて 0
2. 1 行目から  $r$  行目の各行には、pivot が 1 つずつ存在して
  - pivot は「だんだん右に」分布する
  - どの pivot も「その左と下」の数 (ないかもしれない) は 0 になっている

$$\begin{pmatrix} 0 & \cdots & 0 & a_{1,j_1} & \cdots & & \cdots & * \\ 0 & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & 0 & a_{2,j_2} & \cdots & \vdots \\ \vdots & & & & & & & & \ddots \\ 0 & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & 0 & a_{r,j_r} & \cdots \\ 0 & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & 0 \end{pmatrix}$$

のような行列のこと (ここで  $j_1 < j_2 < \cdots < \cdots < j_r$  かつ  $a_{1,j_1} a_{2,j_2} \cdots a_{r,j_r} \neq 0$ )。ここで非ゼロな数  $a_{1,j_1}, a_{2,j_2}, \cdots, a_{r,j_r}$  は **pivot** (枢軸) と呼ばれる。

ランク標準形 (rank normal form) 対角線に 1 が連続していくつか並んで、他は 0 である

$$\begin{pmatrix} E_r & O \\ O & O \end{pmatrix}$$

のような行列。  $m \times n$  行列  $A$  に、行基本変形と列基本変形をうまく施すと、必ずランク標準形にできる。さらに得られるランク標準形は一意的である。これは  $A$  と  $P^{-1}AQ$  を同値と思う同値関係の標準形とも同じである。

ランク (階数, rank)  $m \times n$  行列  $A$  の  $\text{rank}(A)$  は、いくつかの同値な特徴づけを持つ:

1.  $A$  のランク標準形の 1 の個数  $r$
2.  $A$  を掃出し法で階段行列にしたときの pivot の個数
3.  $\dim \text{Im } F_A$
4. ある  $r$  次小行列式がゼロにならない, 最大の  $0 \leq r \leq \min\{m, n\}$

小行列 (submatrix)  $m \times n$  行列  $A = (a_{ij})_{1 \leq i \leq m, 1 \leq j \leq n}$  の  $r$  次小行列とは,  $(a_{ij})_{i \in I, j \in J}$  の形で得られる  $A$  の部分  $r$  次正方行列のことである (ここで  $I \subseteq \{1, \dots, m\}$  と  $J \subseteq \{1, \dots, n\}$  は  $|I| = |J| = r$ )。  $r$  次小行列は  ${}_m C_r \times {}_n C_r$  個存在する。

置換 (permutation)  $n$  点集合  $\{1, 2, \dots, n\}$  からそれ自身への全単射  $\sigma : \{1, 2, \dots, n\} \xrightarrow{\sim} \{1, 2, \dots, n\}$  のこと。  $\sigma = \begin{pmatrix} 1 & 2 & \cdots & n \\ \sigma(1) & \sigma(2) & \cdots & \sigma(n) \end{pmatrix}$  のように 2 行表示される。

行列式 (determinant)  $n \times n$  行列  $A = (a_{ij})_{1 \leq i, j \leq n}$  について

$$\det A = \sum_{\sigma: n \text{ の置換}} \text{sign}(\sigma) a_{1, \sigma(1)} a_{2, \sigma(2)} \cdots a_{n, \sigma(n)}.$$

転倒数 (number of transpositions)  $\text{trans}(\sigma) = |\{1 \leq i < j \leq n \mid \sigma(i) > \sigma(j)\}|$ .

符号 (signature)  $\text{sign}(\sigma) = \prod_{1 \leq i < j \leq n} \frac{\sigma(i) - \sigma(j)}{i - j} = (-1)^{\text{trans}(\sigma)}$ .

サラスの方法 (Sarrus's rule)  $2 \times 2$  行列と  $3 \times 3$  行列の行列式を定義通り求めること.

$$\begin{vmatrix} a & b \\ c & d \end{vmatrix} = ad - bc, \quad \begin{vmatrix} a & b & c \\ d & e & f \\ g & h & i \end{vmatrix} = aei + bfg + cdh - ceg - bdi - afh$$

余因子 (cofactor)  $n \times n$  行列  $A$  の  $i$  行  $j$  列を削除し,  $(n-1) \times (n-1)$  行列  $B$  を得たとする.

$(-1)^{i+j} \det B$  を  $A$  の  $(i, j)$  余因子と呼び,  $\tilde{a}_{ij}$  と書く.

余因子行列 (cofactor matrix)  $n \times n$  行列  $A = (a_{ij})_{1 \leq i, j \leq n}$  について,

$$\tilde{A} = \begin{pmatrix} \tilde{a}_{11} & \tilde{a}_{21} & \cdots & \tilde{a}_{n1} \\ \tilde{a}_{12} & \tilde{a}_{22} & \cdots & \tilde{a}_{n2} \\ \vdots & \cdots & \ddots & \vdots \\ \tilde{a}_{1n} & \tilde{a}_{2n} & \cdots & \tilde{a}_{nn} \end{pmatrix}$$

で与えられる  $n \times n$  行列 (転置に注意).  $\det A \neq 0$  ならば  $A^{-1} = \frac{1}{\det A} \tilde{A}$ .

余因子展開 (cofactor expansion)  $n \times n$  行列  $A$  の  $\det A$  を再帰的に求める方法.

( $i$  行)  $\det A = a_{i1}\tilde{a}_{i1} + \cdots + a_{in}\tilde{a}_{in}$

( $j$  列)  $\det A = a_{1j}\tilde{a}_{1j} + \cdots + a_{nj}\tilde{a}_{nj}$

以下は,  $4 \times 4$  行列の 1 列に関する余因子展開である.

$$\begin{vmatrix} a_{11} & a_{12} & a_{13} & a_{14} \\ a_{21} & a_{22} & a_{23} & a_{24} \\ a_{31} & a_{32} & a_{33} & a_{34} \\ a_{41} & a_{42} & a_{43} & a_{44} \end{vmatrix} = a_{11} \begin{vmatrix} a_{22} & a_{23} & a_{24} \\ a_{32} & a_{33} & a_{34} \\ a_{42} & a_{43} & a_{44} \end{vmatrix} - a_{21} \begin{vmatrix} a_{12} & a_{13} & a_{14} \\ a_{32} & a_{33} & a_{34} \\ a_{42} & a_{43} & a_{44} \end{vmatrix} \\ + a_{31} \begin{vmatrix} a_{12} & a_{13} & a_{14} \\ a_{22} & a_{23} & a_{24} \\ a_{42} & a_{43} & a_{44} \end{vmatrix} - a_{41} \begin{vmatrix} a_{12} & a_{13} & a_{14} \\ a_{22} & a_{23} & a_{24} \\ a_{32} & a_{33} & a_{34} \end{vmatrix}$$

最小多項式 (minimal polynomial)  $n \times n$  行列  $A$  の最小固有多項式  $\varphi_A(t)$  とは, 条件

- $\varphi_A(t)$  は定数多項式でなく (つまり 1 次以上)
- 最高次係数は 1 (つまりモニック)
- $\varphi_A(A) = O$

を満たす最低次数の多項式 (ただ 1 つ存在することが示せる).

固有多項式 (eigen polynomial, characteristic polynomial)  $n \times n$  行列  $A$  の固有多項式  $\chi_A(t)$  は

$\chi_A(t) = \det(tE_n - A)$  と定義される. 実は固有値は固有多項式の解と同じである.

ケーリー・ハミルトンの定理 (Cayley-Hamilton theorem)  $n \times n$  行列  $A$  について,  $\chi_A(A) = O$ .

これから  $\varphi_A(t)$  は  $\chi_A(t)$  を割り切ることが分かる.

固有値・固有ベクトル (eigenvalue, eigenvector)  $n \times n$  行列  $A$  について,  $\lambda \in K$  が  $A$  の固有値で

あるとは,  $Av = \lambda v$  かつ  $v \neq 0$  なる  $v \in K^n$  が存在することを言う. このとき  $v$  を固有値  $\lambda$  の固有ベクトルと呼ぶ.

固有空間 (eigenpolynomial, characteristic polynomial)  $n \times n$  行列と  $\lambda \in K$  について,

$$V_\lambda = \{v \in K^n \mid Av = \lambda v\}$$

と定義される. つまり:

- $\lambda \in K$  が  $A$  の固有値  $\Leftrightarrow V_\lambda \neq \{0\}$
- $v$  が  $A$  の固有値  $\lambda$  の固有ベクトル  $\Leftrightarrow v \neq 0$  かつ  $v \in V_\lambda$

対角化 (diagonalization)  $n \times n$  行列  $A$  について, 可逆行列  $P$  をうまく選んで,  $P^{-1}AP$  を対角行列にすること.

## 2 行列式 ( $A, B$ を $n \times n$ 行列とする)

- $0 \neq \exists v \in K^n, Av = 0 \Leftrightarrow \det(A) \neq 0$  (固有値が固有多項式の根である理由)
- $\det(E_n) = 1, \det(AB) = \det(A) \cdot \det(B)$  (乗法保存則)
- $\det(A) = \det({}^t A)$  (転置不変性)
- $K = \mathbb{R}$  のとき,  $A = (a_1, \dots, a_n)$  のように  $n$  次元縦ベクトル  $a_1, \dots, a_n$  を並べた形で書くと  $\det(A)$  は  $a_1, \dots, a_n$  の張る平行 6 面体の符号付き体積である (図形的意味).
- $\det : \text{Mat}_n(K) \rightarrow K$  は多重線形性と交代性を持ち, 正規化条件  $\det(E_n) = 1$  に従う. 逆に, 写像  $F : \text{Mat}_n(K) \rightarrow K$  が多重線形性と交代性を持つならば, ある  $c \in K$  が存在して (実は  $c = F(E_n)$  である),  $F = c \cdot \det$  が成り立つ ( $\det$  の特徴づけ).

## 3 行列の対角化 ( $K = \mathbb{C}$ で $A$ を $n \times n$ 行列とする)

- $A$  が対角化できる必要十分条件は, 固有多項式・固有空間・最小多項式のどれでも言える:  
 (固有多項式) 固有多項式が  $\chi_A(t) = (x - \alpha_1)^{m_1} \cdots (x - \alpha_s)^{m_s}$  と分解する場合 (ただし  $i \neq j$  ならば  $\alpha_i \neq \alpha_j$  で  $m_1, \dots, m_s \geq 1$ ), 任意の  $1 \leq i \leq s$  について  $\dim V_{\alpha_i} = m_i$  が成り立つ (対角化可能と限らない場合には  $1 \leq \dim V_{\alpha_i} \leq m_i$  が成り立つ)  
 (固有空間) 固有値を  $\alpha_1, \dots, \alpha_s$  とすると (ただし  $i \neq j$  ならば  $\alpha_i \neq \alpha_j$ ),  $\mathbb{C}^n = V_{\alpha_1} \oplus \cdots \oplus V_{\alpha_s}$ .  
 (最小多項式) 最小多項式が  $\varphi_A(t)$  が重根を持たない
- 特に  $\chi_A(t) = 0$  が  $n$  個の解を持つ ( $\Leftrightarrow A$  が  $n$  個の固有値を持つ) ならば,  $A$  は対角化可能.
- $A$  が対角化可能な場合,  $P^{-1}AP$  が対角行列になるような可逆行列  $P$  は,

$$P = (p_{1,1}, \dots, p_{1,d_1}, p_{2,1}, \dots, p_{2,d_2}, \dots, p_{s,1}, \dots, p_{s,d_s})$$

と取れ ( $p_{\ell,1}, \dots, p_{\ell,d_\ell}$  は  $V_{\alpha_\ell}$  の基底), このとき  $D = P^{-1}AP$  は, 対角線に

$$\underbrace{\alpha_1, \dots, \alpha_1}_{d_1 \text{ 個}}, \underbrace{\alpha_2, \dots, \alpha_2}_{d_2 \text{ 個}}, \dots, \underbrace{\alpha_s, \dots, \alpha_s}_{d_s \text{ 個}}$$

が, この順に並んだ対角行列になる (これは計算することなく求まる).